

第1巻 「我とは何ぞや」

(S36年6月・神戸)

Disc 1	56:42
Disc 2	55:13
Total	111:55

【Disc 1】

【track 1】 もう、まもなく、8月ともなると、日照りの雲を望むような、待ち焦がれているあの夏の修練会が来ますから、このときは10日ですから、5日の倍ですから、今度よりもしんみりお互いに、しかも朝から夕方までですから。講習会のように夜のわずか2時間ぐらいの短い時間と違って、十分、本当の親しさで一日が暮らせるであろうことを考えるときに、本当に何とも言えない、私は楽しみでもって毎年の夏を、いつも心の中に描きながら、こうしてご奉公にいそませてもらっている次第であります。

さて、今晚は人間が本当にどんな場合であろうと、病であろうと、はたまた運命が良くない場合であろうと、いつも事あるも事なき日のそれのごとく、「晴れて良し 曇りて良し 富士の山」というような気持ちで、いわゆる文字どおり安心立命という状態で生きられる、その目的を達する秘訣であります、今晚、お聞きに入れるのは。

ただし、私が何十年かかって、今も井上講師（恒夫。大阪支部理事長、講師）の口からその片鱗^{へんりん}が伝えられましたが、病を身に持ちながら、いつ何時倒れるかわからない、自分の死に対する運命をもとより承知の上で、日本を離れて、親の元から遠く、アメリカだ、ヨーロッパだ、世界の三分の二を歩き回って、その上、インドの山の中へ3年も入って。それも何も物好きに入ったわけではなく、なんとかして人生、人ごとじゃなく、我がことであります。このまま死んでしまったんじゃ、結局、無学文盲^{むがくもんもう}、何も目に一丁字のない野蛮人と同様の死に方をした結果がこやしないかと。かりそめにも、多少